持続可能な社会の形成者を育成する社会科観光教育の授業開発
～エコツーリズムを教材として～

B2E12016　神田 絢香

はじめに

本論の目的は、持続可能な社会の形成者の育成を目指す授業を開発することである。そのために、エコツーリズムを取り入れた社会科観光教育の考え方を授業開発の基礎に据える。

社会科といえばどのような学習を思い浮かべるであろうか。小学校では地域学習、産業学習、国土学習、歴史学習、公民的な学習を学年ごとに分け、社会科の授業を行っている。つまり、様々な学習という「型」を通して、我々は「社会科」を学んできたのである。しかし、今日社会科の学習に対して「暗記モノ」、教師の「価値注入」といったイメージを多くの人がもつようになってしまった。それは社会科における学習内容の扱い方や教師の授業構成が要因としてあげられるだろう。

本来、社会科は社会生活の理解を通して、国に対する愛情を育て、将来の社会形成者として児童の公民的資質の基礎を養うものである。これは社会科の最終目標としても掲げられている。では「将来の社会形成者」とは何か、それは学習指導要領に拠れば、次のようなものである[1]。

> 「公民的資質」とは，国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者，すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している。したがって，公民的資質は，民主的，平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち，　自他の人格を互いに尊重し合うこと，社会的義務や責任を果たそうとすること，社会生活の様々な場面で多面的に考えたり，公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。　こうした公民的資質は，日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに，持続可能な社会の実現を目指すなど、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎をも含むものであると考えられる。

つまり「将来の社会形成者」は、社会科を通してよりよい社会の形成に参画する資質や能力をもった者とされているのである。今日、日本は格差社会、少子化社会、年金問題、諸外国との外交問題など、様々な面において課題が山積みである。我々はこのような社会を担っ

[1] 文部科学省　2010　『小学校学習指導要領解説　社会編』東洋出版社、p.12；但し、下線は引用者による。

ていかねばならない。しかし、社会を担う形成者というのは、現在の社会に上手く対応していく能力を備えた者というだけではない。形成者は自らが主体となってよりよい社会を築き上げようとする力である。そしてそれを育成するためには、児童がインプットした知識・技能を発展させて主体的にアウトプットさせることが必要だとされているのである。

この「将来の社会形成者」の育成に通ずるとされるのが「観光学習」と呼ばれるものである。これまで観光は娯楽の領域と思われており、公教育のテーマとしてはふさわしくないものとされてきた。しかし、今や観光立国となった日本は観光を教育として取り上げることに力を入れ始めたのである。その要因として 2 つ挙げられる。1 つ目は、日本の世界遺産があちらこちらにできると同時に、人々がその指定された地に目を向け、新たな観光地として話題を呼ぶなど、現代の観光が時代の推移を反映する社会現象となっていることである。2 つ目は、観光の発展によって環境破壊をもたらしたり、社会・経済問題を発生させたりしてしまうことである。また、平成 20 年度版の『小学校学習指導要領解説社会編』では観光に関する内容も新たに加えられた[2]。このような動向のなか、佐藤克士は観光教育の必要性を以下のように述べている[3]。

> しかし、近年叫ばれている観光教育は、観光需要が増大し続けている現代社会において、多くの人々が「ゲスト」や「ホスト」となる可能性の高さや持続可能な観光の実現を目指す人材育成の必要性から観光基礎教育として初等教育段階から取り組むべきものとして捉えられている。具体的には、観光現象の“学術的”知識（観光研究の成果）の習慣を通して、観光の全体像を科学的に見渡せるようになることが目指されている。このように観光（基礎）教育が、（科学的な）認識形成を通して資質育成を目標としていることは、「（科学的な）社会認識形成を通して市民的資質の育成」を目標と掲げる社会科教育とも論理的に整合する。

ここで注目すべきは、観光教育は持続可能な観光の実現を目指す人材育成の必要性がある、と佐藤が述べているところである。持続可能な観光の実現は「観光」という「型」を通して社会科の目標である持続可能な社会の実現を目指す一つの道になると捉えることが出来る。観光教育が目指す方向性は社会科教育が目指す方向性と一致し、観光教育は社会科教育の中の一つの「型」として位置づけることができるのである。筆者は、社会科に観光学習を取り入れることで、社会科の最終目的を目指した授業開発を実践することが出来ると考える。

観光学習は徐々に社会科としての授業実践が行われ始めてきている。しかし、佐藤克士

---

[2] 文部科学省　2010　『小学校学習指導要領解説　社会編』東洋出版社、p.45。

[3] 佐藤克士　2012　「持続可能な社会の形成者としての社会科観光教育―イギリス地理テキストブック“Horizons 2 Geography 11-14”を手がかりにして―」、社会科教育学会『社会系教科教育学研究』（第 24 号）、 pp.21-30。

はこれまでの社会科観光学習を地域理解、愛国心育成、社会認識と「子どもたちの理解や国を愛すること」に留まっていると指摘し、持続可能な社会の形成者育成に関しては不十分であるとしている。そして、佐藤は社会認識形成・市民的資質育成の授業モデルを提示した。これは、観光学習から得た様々な社会的知識から、観光産業による恩恵と損失を明らかにして、その結果から持続可能な観光の意義やあり方について検討する展開となっている[4]。観光の恩恵に対し、損失を扱うことで観光の良い面だけでなく、問題や課題にも着目させる。これらを通して観光の発展に、より現実味を帯びた状態で考えさせることができる。

しかし、佐藤の社会認識形成・市民的資質育成では、観光客が集まる手段として、観光地の経済情勢、社会情勢、観光資源などを理解し、検討するに留まっている。観光客を集めるのは観光地の人々が行う取り組みだけではない。「メディア」や「口コミ」といった周囲の影響も関連するのである。観光地が発展するには、人々の観光に対する「まなざし」がどのようなものかを理解し、またその「まなざし」を活用する必要がある。観光地を含む周囲の影響や取り組みから観光地の発展を、そしてどのようなことを発信すべきかを考えるべきである。

筆者は佐藤の「観光産業による恩恵と損失」を明確にする点、また筆者が佐藤の実践から欠けていると指摘した「観光客を呼び寄せるメディア関係」を扱うという 2 点を授業開発に取り組み、持続可能な観光学習の開発を行う。さらに、2 点を取り入れて持続可能な観光学習を行うために敷田のエコツーリズムという観光スタイルに着目した。では「エコツーリズム」とは何か、敷田は以下のように述べている[5]。

> 今までの観光は、観光地の環境や社会に対する思案が少なく、単に観光する場所として観光地を捉えていたため、ほとんどの観光地で観光の弊害が発生していた。そこでマスツーリズムという言葉で表現される今までの観光ではない、別のスタイルの観光（Alternative tourism）が望まれるようになり、その１つとして生み出されたのがエコツーリズムである。…（中略）…。日本エコツーリズム協会でも、エコツーリズムの定義は多岐にわたるとした上で「地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護・観光業の成立・地域振興の融合を目指す観光」だとしている。

つまり、今までの単に観光する場所としか捉えられていなかった観光（マスツーリズム）

---

[4] 佐藤克士　2012　「持続可能な社会の形成者としての社会科観光教育―イギリス地理テキストブック“Horizons 2 Geography 11-14”を手がかりにして―」、社会科教育学会『社会系教科教育学研究』（第 24 号 ）、pp.21-30。

[5] 敷田麻実　2008　「自律的観光から持続可能な地域を目指して：エコツーリズムという試み」、『北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　大交流時代における観光創造』（大 70 巻）、pp.75-96。

に対し、観光地の活性化、存続を考える上で新たな観光（エコツーリズム）という観光スタイルが適している、と敷田は述べている。筆者は佐藤、敷田が今までの観光の欠点を指摘したように、今までの観光スタイルでは、持続可能な社会の形成者を育成する「現実味のある観光学習」を行うまでに至っていないと考える。そこで「現実味のある観光学習」を行うために、地域資源の存続や経済効果の実現をねらいとしているエコツーリズムの観光スタイルを用いる。

新たな観光スタイルであるエコツーリズムは、3 つの基盤から成り立つ。それは、観光が自然環境に与える影響を最小限に押さえようとする点（資源の保護）、観光を充実させる点（観光業の成立）、観光地の利益につながる地域づくりを行う点（地域振興）の 3 点である。そこで筆者は、上記で述べた佐藤克士の論文から授業に取り組みたい「観光産業による恩絵と損失」と「観光客を呼び寄せるメディア関係」の 2 点をエコツーリズムの 3 つの基盤と照らし合わせる。そうすると、「観光産業による恩絵と損失」は、損失面で観光地の環境について取り上げ、改善を図る学習があるため主に「資源の保護」の枠に属す。また、「観光客を呼び寄せるメディア関係」は、観光業の充実につながる観光客の引き込み方に注目させるため主に「観光業の成立」の枠に属す。

以上、エコツーリズムの「資源の保護」「観光業の成立」に関して、具体的に示した。しかし、エコツーリズムでは 3 つの基盤としてもう 1 つ「地域振興」が含まれる。寺本潔は、観光における資質について、今後一層求められるのは日本へ観光にやってくる外国人に対して、もてなしの精神で受容できる観光知を有した人材育成である、と述べている。観光地に住む地域住民も知識と出迎える精神を保有する必要があり、自らの市の自慢できる箇所をさりげなく誇りをもって紹介できる所作こそが日本型の観光ホスピタリティである、としている[6]。つまり、観光において、観光業に携わる者だけがその土地の観光知識を有しているのではなく、観光地の住民が観光知識をもって紹介できることこそ日本のこれからの観光の姿でなくてはならない。

2020 年には東京でオリンピックが開かれ、多くの外国人観光客が訪れることが予想されている。このように今後、日本は様々な機会を通して、より大きな観光立国となるだろう。このような状況が想定されるなかで、観光教育を通して観光地の住民が観光を外に発信できるような力の育成が必要不可欠となるのである。

そのためにも観光学習では、地域での観光に対する取り組みとして、社会参画の視点を取り入れる。吉田は社会参画学習を以下のように、述べている[7]。

社会科が育成すべき社会参画力を次のように定義した―それは「様々な社会的役割の担い手は、何

---

6 寺本潔　2013　「地理教育が主導する観光の授業―その学習の意義について―」、『愛知教育大学地理学会』（第 115 号）、pp.67-72。

7 吉田正生　2013　「小学校社会科「社会参画」の授業プラン―ボランティアグループ「なずなの会」を教材として―」、社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究（第 25 号）、pp.11-16。

をなすべきか・できるか・なすべきではないかを実施方策も含めて考え得る知識・技能・態度である。」

行為主体を公―共―商―私の各領域に求め、その行為主体がある社会問題解決のために何ができるか・すべきか・すべきでないかを学習者に考究させようとするものである。

社会の担い手として、学習において実施方策を練る段階を取り入れることで社会参画に一層近づくことが出来る。さらに、公－共－商－私の 4 つの視点に立ち、それぞれ具体策を考えさせることは、より現実味のある方策を編み出すことに繋がる。筆者は、吉田の社会参画学習論をエコツーリズムの 3 つ目の基盤である「地域振興」として取り入れる。観光の発信として公－共－商－私と 4 つの視点から地域の役割を考察し、提案や実行に移すことで地域全体での観光づくりを行うことが出来ると考えるからである。

以上のことから本論では、社会科において観光学習という新たな分野から持続可能な社会の形成者の育成を目指した授業開発を行う。また、上記から持続可能な社会の形成者の育成を、観光教育を通して行う理由を 2 点述べる。1 点目は観光教育が社会科の方向性と一致している点である。2 点目はエコツーリズムを教材とすることで観光地の活性化、存続に配慮できた持続可能な観光を思考、実行することが出来る点である。

そこで本論では、以下の 3 つの観点から授業プランを開発する。

(1) 資源の保護として「観光産業による恩恵と損失」に視点を置き、観光地のマイナス面から観光問題について考え、改善しようとする力の育成
(2) 観光の充実として「観光客を呼び寄せるメディア関係」に視点を置き、観光発展を観光客の「まなざし」の視点から考える力の育成
(3) 地域振興として「公－共－商－私から地域での観光づくり」に視点を置き、地域の観光業について理解し、広い視野で観光発展について考えられる力の育成

以上、三つの習得内容を踏まえた授業プランを開発する。

そこで以下、本論を次のように構成する。まず、「まち・地域づくり」学習や観光学習の授業実践を分析し、問題点を明らかにする。そのうえで筆者の考える観光教育の必要性と結び付け、本論の目指す授業像を明確にする（Ⅰ章)。次に、敷田の「エコツーリズム」の三点の理念を踏まえ、エコツーリズムの意義や特徴を分析し、観光教育と関係づけて論じる（Ⅱ章)。続いて、吉田正生の「社会参画学習」論を考察し、エコツーリズムの習得内容を踏まえた授業モデルと関係づけて再構成する（Ⅲ章)。そして、本論が目指す授業モデルを提示し、教材地域として取り扱う川越市の観光業について論述する（Ⅳ章)。最後に、エコツーリズムを教材とした持続可能な社会の形成者の育成を目指した、小学校中学年社会科観光教育の授業案を作成する（Ⅳ章)。

本論の構成

はじめに
第一章　観光教育の先行研究について
　第一節　「まち・地域づくり」学習の分析
　第二節　観光学習の分析
　第三節　本論が目指す授業像
第二章　持続可能な地域を目指す「エコツーリズム」
　第一節　エコツーリズムについて
　第二節　本論とエコツーリズムの関連
第三章　「社会参画」力の育成
　第一節　社会参画学習について
　第二節　社会的役割について
　第三節　本論と「社会参画」力の関連
第四章　川越における観光学習
　第一節　本論が目指す授業モデル
　第二節　教材について
第五章　授業プラン
おわりに